

シェリング『世界年代』の述定存在論

マルクス・ガブリエル

翻訳：小野 純一

遅くとも『自由論』の序論以降、シェリングは同一性の謎を自分の思考の中心へ寄せてきている。この場合、私は「同一性の謎」を、いかにして同一性の命題が情報を与えかつまた無矛盾的でありうるかという問いとして理解する。一見、 $A=B$ は、A が実際は B ではなくまさに A、あるいはある一つの矛盾が問題となっているように思われる。「A」と「B」は同一のもの（従って A でありかつ B でもあるもの）か、もし両者が実際に A と B に関係するなら、この命題は偽ないし矛盾である。例えばヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』にこう書いている。

「ついでに言う、二つのものについて同一だと述べるのは無意味であり、一つのものについてそれ自身と同一だと述べることは、何事すら述べていない」¹。

ヴィトゲンシュタインはそこから、いかなる本来の形而上的（彼にとっては論理的）機能も等号で表現された同一性には対応しないと推論する。その背景にある基本前提は共有可能か不可能なものである。確かなのは、ヴィトゲンシュタインの方法一般に相当するものを消し去る目的で同一性の謎を定式化することにシェリングが満足していないことである。むしろシェリングはいわばヴィトゲンシュタインが切り上げたところから取り掛かるのである。

既に同一哲学期にシェリングは同一性の謎が存立することを予感しているが、彼の哲学は中期になって初めてこの謎とともに始まるのである。その際、背後には判断にかんする興味深い同一性理論がある。この同一性理論に対する標準的異論は、「A は B である」における繫辞「ist [である]」は同一性を意味しえないというものである。私がペーターは大きいと述べるとき、私はペーターが大であることと同一だとは述べていない。だが、まさしくこれはシェリングの見解を代弁するものではなく、むしろシェリングは同一性が「同一さ [Einerleiheit]」²を必ず

¹ Wittgenstein, L.: Tractatus logico-philosophicus (=TLP) Frankfurt/Main 1985, 5.5303, S. 62.

² 『世界年代』でもシェリングは「同一さ」と「統一性」を区別している。例えば、次を参照。F.W.J.: Die

第1部【講演】と【発表】

しも意味しないという示唆でもってこの見解を退ける。「同一さ」はここでは厳正な同一性 [strikte Identität] を意味し、これは A と B が、全ての観点および全ての水準で同一の性質を有する限りで成り立つ。つまり、 $\forall x \forall y [x = y \Rightarrow \forall E (Ex \Leftrightarrow Ey)]$ であり [訳注：全ての x と y に次のことが妥当する、すなわち x が y と同一なら、導かれるのは、x への全ての述定は y へのそれと等価である]、この場合ここでの「E」はまた前述のように全観点と全水準をも含む。この厳正な同一性という意味で $2+2=4$ ではありえない。というのも、 $2+2$ は 4 とは異なる性質を持つからである。前者は例えば二つの同様の大きさの偶数の自然数に区別されているが付加により結合している性質で、数に当てはまらないものである。厳正な同一性もしくは同一さは従って情報が一切媒介されないところ、つまり次のような明らかなトートロジーの場合でしか成り立ちえない。

(T) ウルリヒという唯一の馬はウルリヒという唯一の馬と同一である。

(T) は事情次第でまだ他にそういう馬がいると争いうることを前提にする。いずれにせよ無造作には明らかなトートロジーを立てられない、そうでなければ

(T[#]) 丸い正方形は丸い正方形である。

すら認めることになる。 (T[#]) は、丸い正方形は存在しないゆえに、真ではありえない。しかし、妥当する馬が存在するという見かけ上の付帯条件が満たされるや、(T) に関しては同一性の事例が問題になる。だがこれは存在論における同一性をもっては意図されえない。仮に肉体 [Leib] と靈魂 [Seele] (あるいはより現代的には脳 [Gehirn] と精神 [Geist]) の同一性理論を支持するとき、ウルリヒという馬がそれ自身と同一であるのと同じように脳と精神が同一だという主張が必然的になされているのではない。そういう主張はせいぜい消去主義的唯物論者 [eliminative Materialisten] のなすところだが、その場合でも依然として彼らは、なぜ我々が「脳」や「精神」という異なった表現と異なった言葉を用い、その結果なぜなぜ両表現を有意義に用いることが出来るのか我々に説明する義務がある。

情報提供的かつ無矛盾的な同一性判断のシェリングによる分析は、『世界年代』の次の箇所できりわけ明瞭に示されており、今日、私はこの箇所を詳細に解釈しようと思う。シェリン

Weltalter, zit. nach: *Sämtliche Werke*. Hg. v. K.F.A. Schelling, Bde. I-XIV (urspr. in zwei Abteilungen erschienen: I. Abt., Bd. 1-10 und II. Abt., Bd. 1-4), Stuttgart: 1856-1861 (= SW), hier: SW, IV, 238f.

グはこう主張している。

「確かにまさしく靈魂は肉体であり肉体は靈魂だとは言われずとも、しかしある点で肉体である同じものが別の点では靈魂であるとは十分いわれよう。[...] 各判断もしくは最も分かり易い判断 $A=B$ の真なる意義とは元来、 A であるものが B でもあり、その場合、いかに紐帯 [Band] が主語にとっても述語にとってもともに基礎をなしているかが示されるということである。ここではそれは単純な一性 [einfache Einheit] ではなく、自分自身で倍加された [verdoppelte] 一性あるいは同一性の同一性である。 A は B であるという命題には、第一に A は X であるという命題（主語と述語がともにそれによって同一であり、毎回名指されるのではないあの〈同一のもの〉）、第二に X は B であるという命題が含まれている。そして、これら両者が再び結び付けられることで、すなわち紐帯の重複 [Reduplikation] によって初めて、第三として、 A は B であるという命題が成立する」³。

次の判断を例にとろう。

(U) ペーターは大きい。

この判断のシェリングによる分析は、ある X が存在し、それはある観点ではペーターであり別の観点では大である、というものである。この X は代名詞的に導入されるもので、ヴォルフラム・ホーグレーベはシェリング述定理論の画期的再構成のなかで「代名詞的存在 [pronominale Sein]」と特徴付けた⁴。判断 (U) は、それがペーターでもありかつ大きくもであると判断される何かに関連付けられているのである。

とりわけ、判断が両方の観点で偽と証明されうることによってこれは認識される。(U) は、これがペーターでなければ（たとえばアンドレアス）偽であるし、なおかつこれがペーターであっても大きくなければ偽である。(U) の三つ目の前提で、我々がこれから取り上げることになるのは、そもそもそこに何かあること、ある X が存在し、これを我々はペーターでもありかつ大きくもあるということによって個体化している。そこから (U) に対する次の分析がもたらされる。

³ SW, IV, 240.

⁴ これに関しては次を参照。Hogrebe, W.: *Prädikation und Genesis. Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings »Die Weltalter«*. Frankfurt/Main 1989, bes. §17.

第1部【講演】と【発表】

(U*) $\exists x (Px \ \& \ Gx)$

[訳注：少なくとも x があり、それは Px かつ Gx である。P はペーター、G は大]

(U) は、シェリングの分析に従えば最低二つの真理適合的 [wahrheitsfähig；真偽の区別が可能] 判断、つまりシェリングが「紐帯の重複」⁵と特徴付けた Px と Gx からなる。その根拠は容易く跡付けうる。判断「ペーターは大きい」において我々はただ一つの繫辞をもち、それは次の二つのように内的に倍加されている。

(U2) „X ist P“

(U3) „X ist G“

しかしこれに伴いここでもまた早くも致命的な問題がもたらされるように思われる。もし、(U) の分析が重複へと至ったなら、このことは必然的に新たな重複をなす (U2) と (U3) の分析を強要しないだろうか。その場合、中間段階として

(U2*) $\exists y (Xy \ \& \ Py)$

を受け入れたであろう。この問題を「判断後退 [Urteilsregreß]」と名付けよう。この致命的後退が生じないように、我々はシェリングのなかによく根拠付けられた後退停止装置 [Regreß-Stopper] の出現を待ち受けて見る必要がある。私のテーゼは、実際にシェリングはある後退停止装置を導入し、それを「無差異 [Indifferenz]」と特徴付けるというものである。彼がこの代わりとして用いたほかの名称は「無差異点」と『自由論』以降は「無根拠 [Urgrund]」である⁶。興味深い例証箇所を吟味するまえに、その背後にある思考の道筋を素描したい。

再度、(U) を取り上げよう。分析ではペーターでありなおかつ大きいなかが存在することが示されている。このことはとりわけ、(U) が最低二つの仕方で偽でありうることを我々が理

⁵ SW, IV, 240.

⁶ 「無根拠」の概念と機能に関しより詳細には次を参照。Gabriel, M.: *Das Absolute und die Welt in Schellings Freiheitsschrift*. Bonn 2006、および „Der Ungrund als das uneinholbar Andere der Reflexion. Schellings Ausweg aus dem Idealismus“, in: Ferrer, D./ Pedro, T. (Hrsg.): *Schellings Philosophie der Freiheit : Studien zu den Philosophischen Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit*. Würzburg 2012, S. 177-190.

シェリング『世界年代』の述定存在論

解するときに示される。そこにいる大きな人物がペーターでない場合、この人物は依然として大きいかもしれない。偽の判断は部分的に偽であった。そのことから結論されるのは、「ペーター」が代名詞的に機能するのではなく、つまりペーターは未だ論理的固有名名ではなく、記述と結び付いているということである。ペーターは、例えば「私が数年前に知り合った人物」あるいは「ヨハンナの友達」である。「ペーター」が意味するのは、あそこのあの人、ではない。我々は直接にペーターを指差すのではない。しかし、では我々は、何を直接に指差すのか。シェリングの答えは、それが大きかろうとこれが何であろうと、我々がそれについて判断する際に自分たちが何かを指差していることさえ認めればよいというものである。(U) は従って大きいものを幻視していても真であろう。また幻視された染みも、例えばそれがペーターと同じくらい大きく見えるなら、大きいように思われるだろう。特定の意義において、このもの [Dieses-Da] (幻視された染み) が大きい、残像にしてはほとんど異常なほど大きいということは、さらに正当であろう。(U) についての分析における「X」はしたがって場所を確保するものである。「X」は「それが何であろうと、私が関係する何か」を指しており、それは一つの一般的論理的固有名であり、いかなる審級においても客観的に確定されており、それゆえ我々はそれに関し判断も誤りうるのである。

では、このものがペーターであるという判断と、ペーターは大きいという判断の想定すべき範疇的差異 [der anzunehmende kategoriale Unterschied] は正確にはどこにあるのか。シェリングの念頭にある相違が姿を現すのは、このものが本当にペーターか疑問に思う一方で、このものが本当にこのものなのか疑問に思うことは出来ないことを我々が自分に分からせるときである。「このもの」は、一般的であるという特別の性質をもつ論理的固有名である。というのも、我々が判断を下すや、何でもこのものになりうるからである。我々が普通の判断で何かに関係し、(それがなんであろうと) 我々が関係するなにかがそこにあることをこの能力が前提にしていることを我々が認識することではじめて一般的代名詞存在は個体化される。認識できるようにするために、認識論的に個体化するために、この何かは用いねばならない記述に関しては無記である [gleichgültig]。判断後退は、論理的固有名とそれに伴う一般的論理的固有名の導入によって中断される。次のような言い方が (U2) の本来のあり方である。

(U2**) このものはペーターである。

ここからさらに次のような判断を引き出すことは出来ない。

(U2***) このものは一つのこのものであるという限りでひとつのこのものが存在する。つまり、

第1部【講演】と【発表】

∃dd (DDdd).

(U2^{***}) では無差異の表現が問題になっている。つまり、なんらの情報ももはや媒介されない。それゆえ、我々がそもそもまだ主語と述語を区別できる観点で、我々が判断について述べるための基準に抵触している。

「というのも、同一さは、いかなる判断においても、単なる反復する命題や説明においてさえも理解されず、むしろつねにある現実的二元性が理解され、それなしでは一性すらなんの意義ももたなからう」⁷。

我々が、このものに関し、それがこのものであり、このものについてそれ以上情報を一切役立てられないことを単に主張するなら、我々は「中立 [Gleich-Gültigkeit]」の立場に達している⁸。すなわち、それはこのものであるということが全てに当てはまる。ここからシェリングは、例えばラッセルの論理的原子論がするようには、基礎付ける指示基層 [eine grundierende Referenzschicht] を我々は想定せねばならないとは推論しない、とは導き出さない。この指示基層は我々のよく習熟しているもので、ラッセルが「直知による知識 [knowledge by acquaintance]」⁹として特徴付けたものである。シェリングは、我々がこの水準では本当の判断に関与していないと認めることで、そこにこのものがあることを書き留めることしかなしい対応記録用言語の想定を始めから回避している。

ここで私は問題を明らかにする二つの反論を検討したい。

第一の反論は、全ての存在者が共有する多くの性質があるというものである。自分自身と同一であるという性質、諸性質を持つ何かであるという性質、特定の論理的法則や規則が認められてはじめて記述されうるという性質など。これらの性質を〈形而上的性質〉もしくは〈論理的性質〉と特徴付けうる¹⁰。あるひとつのこのものであることは、多くの中の一つのそうした形而上的もしくは論理的性質、つまりおよそ何かであるもの全てに当てはまる性質であるとしか思われぬ。伝統的には、論理的形而上的性質も要するに存在論的性質として特徴付けられ

⁷ SW, IV, 239.

⁸ SW, IV, 238.

⁹ 次の古典的論文を参照。 Russell, B.: „Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description“, in: *Proceedings of the Aristotelian Society (New Series)*, Vol. XI (1910-1911), S. 108-128.

¹⁰ これについては次を参照。 Colin McGinn: *Logical Properties: Identity, Existence, Predication, Necessary Truth*. New York 2000.

シェリング『世界年代』の述定存在論

よう¹¹。この場合、それは、このものであることという性質へ立ち戻ることによって判断後退を停止するというシェリングの恣意的決断であろう。任意の X の存在論的性質をどれでも選べようし、様々な結論へ至りえよう。

この異論はただし次の事実を見落としている。あるひとつのこのものであるという性質は、全ての対象に個体化しつつあてはまる性質であり、このことに私は一般的論理的固有名という概念で狙いを定めたのであった。このものは既に個体化されていて、これを我々は判断において表現へもたらす。このものがペーターであり、ペーターは大きいと私が判断するとき、このものは匿名の何かではない¹²。それはまさに、ある観点でペーターであり別の観点で大きいこのものである。ところでこれは第一質料 (πρώτη ὕλη) とこのもの (τὸδε τι) のアリストテレスの区別に対応している。第一質料には性質がなく構造化されていないのに対し、このものはどれも既に個体化されていて、それゆえ我々はこのものに判断でもって関係できる。第一質料については何も叙述できないが、このものにはできる。ヘーゲルが周知のとおり『精神現象学』の序文でシェリングを非難したが、「絶対者」のごとき自己において差異化されていない対象を導入することによってシェリングは判断後退を停止するのではない¹³。むしろそれよりも、我々はこの判断分析に以下のことを見出す。自己において差異化された一つの現実性 [Wirklichkeit] に我々に関係し、この現実性は緒个体からなるが、そこで我々はこれらの个体を概念的に我々の判断方法 [Urteilspraktiken] に組み込み、そうすることで我々はそれらの个体を一般的論理的固有名として、つまりこのものとして使用する。私はこの考察を以下の決定的な一節を背景に捉えており、その一節を逐一引いて議論の対象にしたい。

「[引用者：同一さとは違って] ある別の種類の一性はしかし、同時に対立とともに現れ出て、その結果、収斂する意志 [der zusammenziehende Wille] は自らを主語と述語の紐帯 [引用者：繫辞 Kopula] へとなす。というのも、その時この意思は第一作用 [das erste Wirkende]、中間 [die Mitte]、あるいは両者の共通の結合したものであるから、二つの

¹¹ 様々な理由から私はこの同定を認めない。これに関し詳しくは次を参照。Gabriel, M.: *Fields of Sense. A New Realist Ontology*. Edinburgh 2014 (i. Ersch.).

¹² 匿名の何か [anonymes Irgendetwas] は次を参照。そこで著者は „n'importe-quoi” と呼んでいる。Garcia, T.: *Forme et Objet. Un Traité des Choses*. Paris 2011, v.a. S. 29-31.

¹³ 当然ながら『精神現象学』序文の有名な箇所を参照。そこでヘーゲルは「A=A」について述べ、こう書いている。「絶対者において全ては等しいというこの一なる知を、区別しつつ満たされる、あるいは満たすことを探し求める認識に対抗して持ち出すこと、あるいはよく言うように、全ての牛が黒い夜をその絶対と偽ることは、認識にある空虚のもつ単純さである。」(Hegel, G.W.F.: *Phänomenologie des Geistes*. Hamburg 1988, S. 13)

第1部【講演】と【発表】

対立者はむしろ意思に対し全く同じ実存形式であり、実存的に同じになる。というのもそれらは本質的には同じでなく、より高次のものやより低次のもののように振舞うからである。それは、この実存的同等性 [existenzielle Gleichheit] あるいは実存するものに関して両原理の同等性であり、我々はこの同等性を両者の無記 [Gleich-Gültigkeit] あるいは無差異 [Indifferenz] によって特徴付けたのだった¹⁴。

後退停止装置は、我々が後退を同定するような場で即座に現れる。それゆえ、シェリングが書くように、後退停止装置は「同時に対立とともに現れ出」る。これが意味するのはしかし、我々は、それ自身で差異化されていないある質料、つまりある唯一つのこのもの、があり、これを我々は判断によって徐々に分裂し複数の個体へ変化させるという仮定からは始める必要はないということである。この経過は完全に理解不能なものに留まろうし、それゆえ、シェリングは『世界年代』では一者からの流出あるいは絶対者からの離散という考えに距離をとる¹⁵。

あまり思弁によらず以下のようにしてもこの考えの進め方に近づける。ゴットロープ・フレーゲは「一つの文の関係の中においてのみ語は何かを意味する」という有意義な文脈原理を提案した¹⁶。つまり、「ペーター」も「は大きい」もそれ自身では、それらが一つの文の中で結び付けられていることと切り離しては意味を持たないということである。従って、分節化と切り離されて判断において意味を有する意味論的原子は存在しない。しかしながら我々は判断を分析できるのであり、そういったことをシェリング自身は、「あらゆる判断の第一法則」¹⁷を定式化することで企てている。判断分析において我々は重複を認識し、それとともに必須の後退停止装置としての無差別に遭遇する。その際、ある唯一のこのものがあるだけでなく、「このもの」はまさに一つの一般的論理的固有名であると我々が考えるのは正当である。たとえ我々が頻繁にこの現実性の諸要素のより正確な確定を誤るにしても、我々が関係するひとつの

¹⁴ SW, IV, 238.

¹⁵ 例えば以下を SW, IV, 228 ページを参照:「何によって浄福は純粋さを離れ存在に現出するよう勧められたのか。これは存在に対する永遠、有限なものに対する無限なものとの関係についての問いの日常的表現である。この純粋さが自分自身から現出することは不可能であるか、何かを自分と隔離し閉め出すことは不可能である、あるいは純粋さがそもそも外部へ向かって作用することは不可能であると既に何度も言われている。純粋さは自分自身の中に永遠に留まる。ただ内的運動のみそのような内密さにおいて思考可能になる。これもまた一度ならず、その内で何かが生じると言うことができる。というのも、それはその行為と全く一つであり、それ自身であるから」。

¹⁶ G.フレーゲ『算術の基礎：数の概念に関する論理的数学的研究』（1961年、ダルムシュタット）62節、また60および106節参照。個別には非常に異なった含みを持つヴァイトゲンシュタイン版参照のこと。『論理哲学論考』3.3「文だけが意義を持つ。文の連関の中でのみ名は意味を持つ」。

¹⁷ SW, IV, 239.

自己において差異化された現実があることを判断分析によって我々は認識する。

第二の反論は、シェリングが判断概念を定義するために恣意的な基準を用いているというものである。たとえば彼は人は最低二つの概念を用いた場合のみ判断をすると明確に述べている¹⁸。まさにこの前提により彼は後退を保持してしまう。というのも、このようにして無差異(同一さ)と一性を彼は分けうるからである。ただシェリングはここで十分に補足的な論拠を用意している。とりわけ彼は自分がもろもろの判断について語り、たとえば緒命題や緒事実について語っているのではないことを指し示せる。ある判断において我々はある考えを真であると提示する。あれやこれが話題であり、考え「G」が真であると我々は主張しているのである。もし我々がA=AもしくはAはAであると主張したなら、そのような主張は意義に乏しい。というのも、たとえそのような主張は〈真〉であるか、あまつさえ論理的に真であると表されるかもしれないにしても、有意義な〈主張〉にはなっていないのである。なぜなら、考えの真実性に異論の余地があるかありうる場合にのみ、我々はその考えの真実性を主張するのである。ヴィトゲンシュタインにまたもや幾分違う対峙方向ながらも次の文章が見出される。

「二つの表現の意味の同一性は〈主張〉できない。というのも、両表現の意味について何か主張できるには、私は両者の意味を知っていねばならない。つまり、私が両者の意味を知っていることによって、私は両者が同一か違うことを意味するかが分かるからである」¹⁹。

ヘルダーリンやヘーゲル同様、シェリングは「判断」という語に「部分」という表現を聞き取る。判断は、判断に先立つ一性の分割である。この先立つ一性を我々は同一さとして定式化し、その場合に後退停止装置を見出す。もちろん判断するという我々の実践によって後退停止装置がそれ自身において差異化されているはずだと我々は知っている。判断停止装置は、確かに毎回、同一機能を果たすが、毎回別のこのものによって代替が利く。

シェリングはこの考えを、「存在が存在に付随する非存在であるために各存在者は同時に存在者であり非存在者でなければならない」²⁰という主張で表現する。ヴォルフラム・ホーグラーベは「区別の次元 [Distinktionsdimension]」という概念、つまり違いを的確に捉えるため

¹⁸ SW, IV, 239.

¹⁹ TLP, 6.2322.

²⁰ SW, IV, 239.

第1部【講演】と【発表】

にそれ自身において我々が区別する次元の概念を導入する²¹。「存在」はここでまさにそのような区別の次元に対応するように私には思われる。赤であるという概念によってのみ形成されている単純化された区別の次元が我々にはあると仮定しよう。この次元を我々はいま机は赤いと述べることによって差異化する。それにともない机は区別の次元のうちに現れる。机はある赤であるものである。これはしかし、赤であることがそれゆえひとつの赤であるものになったのでは決してないことを意味する。赤さにより形成される区別の次元において、赤であることはそれ自体、何か赤いものとしてではなく生じうる。

以下の思考実験を使っても「存在」は理解できる。全ての対象が赤い世界に我々は住んでいると一度仮定しよう。この場合、ある対象が赤いという主張はこの対象をほかの対象から区別しないであろう。今度は、別の世界、全ての対象が緑である緑世界を仮定しよう。我々は、ちょうど一つの性質をそれぞれ持つ無数の世界を想像できる。そこに現れる全ての対象はこの性質を分有し、その結果、まさにこの性質は情報を与えるものとは認められえない。というのも、全てが赤である世界で我々は、ある対象が赤であるところの対象について経験することによってのみでは、我々は何らの対象についても知らされてはいないからである。偶然に全てに当てはまるある性質という一般観念、つまり区別の次元という一般観念は、これがある世界では正確にどの性質であるかという問いとは無関係に、「存在」なのである。従って「存在」は内的に全ての存在者に対し差異化されていても、決してある一つの存在者なのではない。シェリングは自ら「存在」は内的に差異化されていると書いている。

「それゆえ「存在」においても分離と融合の交替がある。あるいはむしろ、存在と存在者の間の分離は、存在における分離によって条件付けられており、両者は一致している」²²。

この想定には十分な理由がある。最も重要な理由は、差異化されていない存在から出発しても、

²¹ 「基礎となる諸区分を導入する時はいつでも区別の次元が要求される。それは従って他の空間からもはや区別されず、全く積極的に特徴付けられもしないが、しかし我々はそれが必要である。なぜならそうでなければ我々の区分によって宇宙を生み出せないからである。それは全意味論的対照項の意味論的に完全に透明な背景、その可能性の超越論的条件である」(Hogrebe, W.: *Echo des Nichtwissens*. Berlin 2006, S. 317f.)。またこれに関しホーグレーベの業績から出発したホーグレーベ記念論文集への私の寄稿を参照: „Die Welt als konstitutiver Entzug“, in: Kreis, G./Bromand, J. (Hrsg.): *Was sich nicht sagen lässt. Das Nicht-Begriffliche in Wissenschaft, Kunst und Religion*. Berlin 2010, S. 85-100. ホーグレーベ哲学についてはまた以下の私の論文を参照: „Zum philosophischen Ansatz Wolfram Hogrebes“, in: Gabriel, M./Halfwassen, J. (Hrsg.): *Gadamerprofessur 2006. Wolfram Hogrebe: »Die Wirklichkeit des Denkens.«* Heidelberg 2007, S. 84-104.

²² SW, IV, 248.

我々は一体どのように判断に至るか説明できないだろうというものである。我々はアペイロンのようなタイプの自らにおいて差異化されていないある現実性を差異化された諸関係に移行させることは出来ない。

改めて我々は同一性の謎の解決に取り組もう。上述のようにこの謎はどのようにして同一性の命題があるときは情報を与えるものであり、また無矛盾的でありうるのかという問いにある。厳正な同一性にとってこれは不可能である。それゆえシェリングは同一さと一性を区別する。ここで我々の問題点を部分的に明らかにするフレーゲの基本的観念を取上げよう。フレーゲは「意義と意味について」において意義の概念を導入することで同一性の謎を解く²³。周知のように、彼は二つの表現が異なって関連付けられるあるものが常に同一性の命題には存在すると主張する。従って常に意味の同一性の場合には、意義の差異、与えられてある仕方の差異がある。「宵の明星は明けの明星である」あるいは「宵の明星＝明けの明星」という命題は、朝には一方の仕方で夕には他方の仕方で現れる何かがある（つまり、金星という惑星）ことを意味する。同一のものが二つの異なった仕方で現れるのである。この観点の区別によりフレーゲは同一性の謎を解決できる。これにより、彼は、ある X が存在し、それは宵の明星でも明けの明星でもあるというシェリングの立場を支持するのである。

おそらく違いは、フレーゲがこの X を金星だということによって差異化することにある。ただこれは簡単には機能しない。というのも、フレーゲも認めるように、「金星」という固有名自身は意義を有し、宵の明星として、また明けの明星としての両現象の基礎をなすものとして惑星を呈示している。これにより後退が生じる。ただし、ここでフレーゲもシェリングのように、ある一般的意味つまり意味の可変性を導入することによって、さらに考察する。我々は意味の可変性をいかなる記述を持ってしても、またいかなる意義をもってしても論じ尽くすことは出来ない。それゆえ「金星」が基礎となるものだという主張は本来すでに許されていない単純化である。

「ある固有名の意義は、自分が属する言語もしくは記号の全てを十分に知る者全てに把握される。しかし、これにより意味は、それがあつ場合は、一面的にしか照らし出されない。意味の全面的認識には、我々が与えられた意義全てによって、その意義が意味に属するかどうか直ちに知らされる必要があるが、この認識に我々は決して達しない」²⁴。

²³ Frege, G.: „Über Sinn und Bedeutung“, in: Ders.: *Funktion – Begriff – Bedeutung*. Hrsg. von M. Textor, Göttingen 2007, S. 23-46.

²⁴ Frege: „Über Sinn und Bedeutung“, S. 24f.

第1部【講演】と【発表】

残念ながらフレーゲは、一つの意味つまり我々が関与する何かは、「我々はある意味を前提する」²⁵と既に呈示されていることを想定することで、この問題を実用的にしか解決しない。フレーゲは自ら我々はその場合に誤認しようと述べている。我々は時に実際にはそうでない何かを我々の想像とは無関係に存在するとみなすだろう。この場合、我々の命題は、フレーゲにしてみれば、依然意義はあっても意味はないだろう。

「さて我々はそのような前提において、もちろん間違いうるし、そのような間違いは生じた。我々はもしかすると常に間違うのかという問いにはここでは答えないでおく。ひとまず、そのような意味が存在するという保留の下に、ある記号の意味について話すことを正当化するため話し考える際に、我々の意図に言及することで十分である」²⁶。

これに対しシェリングは実用的な解決には満足しない。というのも彼は我々がある一性的な意味の塊を、つまりその存在を前提にする最大対象を当てに出来ないと認識しているからである。我々は、その同一性を我々が主張するものについて、さらなる想定を必要とする。まさに「世界年代」を次のような試みとして再構築できる。つまり、すでに関連付けの前に個体化されて存在した何かを我々は時に指し示すことが我々には前提可能であることに対する最低条件を見出す試みとして。個体化を概念によるあるいは命題による個体化に依存せず思考することがシェリングでは問題になっている。我々はそれ自体で分節化されていない現実性に概念によるまたは文形式による個体化条件をかぶせない。しかしこのことが意味するのは、あらゆる差異に相対立する一つの存在を我々は当てにも出来ないということである。区別の次元は、このように一性化されて思考されることはできない。もう一度シェリングを引こう。

「それゆえ「存在」においても分離と融合の交替がある。あるいはむしろ、存在と存在者の間の分離は、存在における分離によって条件付けられており、両者は一致している」²⁷。

この叙述を私は次のように理解する。我々が何かを、それはしかじかであると判断するとき、可能性と現実性の背景の前へとそれは現れ出る。我々は何らかのものを選び出し、可能な述語

²⁵ Frege: „Über Sinn und Bedeutung“, S. 28.

²⁶ Frege: „Über Sinn und Bedeutung“, S. 28f.

²⁷ SW, IV, 248.

シェリング『世界年代』の述定存在論

と関連付けたのである。このとき我々がそこから選び出す領域はそれ自身においては述語的には差異化されていないという見解を主張できよう。その論拠は以下のことから導き出せよう。つまり、我々の述定は（満たされている）対象とその諸性質（満たされていない機能によって表現される）との間の違いを前もって考えに入れるが、それに引き換え現実性は無礙に浮動する諸対象からなる一方、他方では無礙に浮動する諸性質からなっている。現実性は述語的に満たされているのである。現実性はそれゆえ述語的には差異化されていない。こうして人は〈現実性についてのあらゆる命題はそれゆえ現実性の中で行なわれる。なぜなら人は命題について何か叙述できるからである〉というシェリングの主要な洞察を見逃す。「～はEである」という性質機能を獲得するために我々は判断において「機能が」満たされていることを断念できる時、この断念の成り行きは現実性において行なわれる。

私はフィヒテやヘーゲルにおいても様々な変化形で見出されるこの基本思想を別の場所で「超越論的存在論」と名づけた²⁸。この言葉で私が意味する存在論は、現実性に関する判断・見解・信念・命題などが常に現実性に属さねばならないことを考慮に入れる存在論である。それゆえ我々は他の対象について誤認するのと同様、判断を誤りうる。なぜなら、我々は判断・見解・信念・命題などについてまさに誤りを免れない形で関与しているからである。述語的分裂、判断は、存在のただ中で生じる。このことにより一方で一元論的な存在の二元論、他方で複数の推論的实践は、当初より克服されているのである。これに伴いシェリングは、一方には精神のない広がり（延長をもつ実体 *res exensa*=世界）と他方には誤りを免れない精神（思惟する実体 *res cogitans*）というデカルト的想定領域へとまずは全く赴かない。精神と世界は両者を完全に異なる領域に分類する仕方では全く有意義に区別はされえない。この観念をシェリングは明らかにスピノザから受け継いでいる。ただし、彼は次のことが正しいと前提している。すなわち、まさにそれゆえに、現実性のただ中において我々の判断は行なわれるのであり、この現実性は諸判断の後にあるのではないと我々は想定せねばならない。フリードリヒは雨が降っていると判断すると私が判断するとき、フリードリヒが判断するという事実の背後に、フリードリヒの判断と異なる現実的な出来事がまだもう一つあるのではないのだ。

最後にわたしはもう一つのかなりラディカルなシェリングの新機軸を論じたい。それによってシェリングは古典的な西洋形而上学から離脱する。この新機軸の表現は次の「優先は優越と逆の関係にある」²⁹という文が示している。古典的な西洋形而上学はシェリングまでは次のように考えてきた。原初のもは形而上学的秩序では善でもある。というのはそもそも他の全て

²⁸ Vgl. Gabriel, M.: *Transcendental Ontology: Essays in German Idealism*. New York/London 2011.

²⁹ SW, IV, 238.

第1部【講演】と【発表】

を存在させるアルケー [archê; 万物の根源] として原初のものが導入される。もし、そもそも何かが存在するなら、秩序の原理がなければならない。その原理は従って存在の基礎である。ここにおいてシェリングは明確に次のことをみている。つまり、それが存在するから、あるいはそもそも何かであるからという理由だけで、全てが「善」であると呼ばれるべきではない。そこから彼は、存在の基礎は価値の観点からせいぜい中立的であると結論する。ヴォルフラム・ホーグレーベは次の文章でこのことの核心に迫っている。

「ニーチェを含めシェリング以外誰も無意味さの疑いの内的可能性を追求し次のような成果をもたらしたものはいない。何かが存在するとはどういうことかという問いがひたすら十分ラディカルに問われる限り、この《疑い》から自由な意義はそもそも存在しない。無意味さの起源がまさに存在することそのものなのである。言いたいのは、我々が最終的に存在という言葉で理解するのは、あらゆる意義に先んじる何かである。この洞察において〈世界の秘密〉がついにシェリングに自らを啓示する、〈存在とは非意義である〉と」³⁰。

シェリングはそれゆえ『自由論』以来、無根拠（原初のもの）と愛をも区別する。愛は、可能的に無意義な存在から超え出る何かである。愛とは成功した関係にシェリングが与えた名称である。述語的領域では愛は真なる判断で、それは我々がこれまでその同一性に気づかなかつたものへ驚きつつ関与する判断である。愛は紐帯である、まさにシェリングが繰り返しプラトンを引き合いに出し言うように。愛は、真なる判断において後退を止揚するのに成功するものである。「存在は固有性であり、隔離である。愛はしかし固有性の無であり、愛は自らを求めず、それゆえ自分自ら存在することはありえない」³¹。

愛の概念は第三の次元を述定理論に導入する。第一の次元は無差異、つまり一般的論理的固有なものであるこのものの次元である。この次元は自らによって個体化された区別の次元という前提に対応し、我々は判断において自らをこの次元に関係づける。第二の次元は、判断自体であり、我々は決して現実性全体を述語的に分節化したことはないゆえ、判断は第一次元の一部のみと重なる。これら二つの次元は、それらが一方で諸個体から他方で個体の可変性から成る「隔離」の形式であり、個体の可変性を我々は判断において詳細に個体化し、それによって記述する。それゆえ我々はしかなおどのように第一と第二の次元の中で一性化が生じうるのか理解していない。同じく殆ど我々は第一と第二の次元がどのような関係にあり、そこで主要候

³⁰ Högrefe: *Prädikation und Genesis*, S. 13.

³¹ SW, IV, 231.

シェリング『世界年代』の述定存在論

補者がこの関係にとって真実であるのだが。ここでシェリング自身は一息に一方で「精神」もう一方で「愛」について述べる³²。私は再構成にあたりここでは一般性の思考の同義語を扱った。一般性は、論理的固有名全ての総体以上のもので、つまり私は抽象化だけによって生起するのではない関係を扱ったのである。「精神」と「愛」が意味するのは、世界がひとつの本物の事実構造を示し、我々はこれを真なる判断において分節化することである。これにたいする伝統的な名称は「叡智」である。シェリングが叡智ではなくいまだ意義ではない存在から始めるゆえに、形而上的秩序原理の指示に基づいてシェリングが拒否したものに存在者の叡智が属することが認められる。

この背景の前でシェリングはまた希望の思想家に、当然誰よりもエルンスト・ブロッホに影響を与えた。なぜなら、シェリングは、世界を始めから善、美、真の秩序下におくのではなく、行為と判断によって叡智を打ち立てることを目指す思考様式を提供するからである。その場合にシェリングがとくに見据えるのは、秩序が儂く偶然的事であることであり、このことは、世界が必然性、アナンケー [anankê ; 普遍的必然性] に埋め込まれているという非常に古い観念と一致していない。シェリングはアルケー [archê] の機能を機能に応じて三つの次元に分ける。その際、彼はこれら三つの次元を、私のもう一つの講演「シェリング『世界世代』における時間哲学」で論じるように、時間の本当の次元として理解している。

³² 精神概念の述定理論的再構成に関し Prädikation und Genesis の 102 頁におけるホーグレーベの見解を参照。そこでホーグレーベは命題可変性ないし「命題の次元 [Propositionsvariable oder Propositionsdimension]」としてを区別の次元、つまり存在と区別できるものを導入する。